

和田垣謙三と明治・大正期の経済学界（Ⅰ）

— 和田垣の経歴と活動を中心に（Ⅰ） —

三島 憲之

1、はじめに—意図と課題—

本稿でとりあげようとする和田垣謙三とは、明治中期から大正期にかけて活躍した経済学者であり、また英語・英文学者であり、さらには『兎糞録』、『吐雲録』などの笑話を中心とする数多くの随筆集を出版したエッセイストである。現在、その著書が一般に読まれることはほとんどないが、当時においては著名な知識人・文化人の一人であったことは間違いない。また、駄洒落の名人、大酒飲み、脱線講義、借金で有名といった、大学教授らしからぬエピソードの多い人物としても知られている。¹このうち以下で対象とするのは専ら経済学者としての和田垣の側面であるが、日本の、いわゆる「官学」における制度化された経済学の教育は、明治11（1878）年、旧東京大学文学部における「お雇い外国人」教師フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa）に始まり、ついで明治14（1881）年、田尻稲次郎がこれを助ける形で大蔵官僚のまま囑託講師として「日本人最初の経済学の教官」²になったとされている。しかし、同校で経済学を担当する専任の日本人教官として採用されたのは、明治17（1884）年、和田垣が最初であった。日本の高等教育機関において経済学が正式の教科として位置づけられ、徐々に制度化・専門化されていく、その最も早い段階を代表す

る人物が和田垣であるといつていい。この点のみを捉えても、経済学者としての和田垣の存在は、明治・大正期の、特に「官学」アカデミズムにおける経済学の歴史を考える上で決して逸することはできないと思われるが、しかしながら、その研究者・教育者としての役割や業績については未だ十分に解明されているとは言い難い状況にある。³⁾

なお、これまで和田垣については、その多方面にわたる活動に対応して、英学史、教育史、経済思想史という主として三つの研究の観点から、その役割や業績について言及・評価がなされてきた。まず、日本の英学史研究からは、明治期を代表する英語・英文学者の一人としての評価が定着している。例えば、高梨健吉は「和田垣謙三博士は井上十吉、神田乃武とともに明治時代の三大英学者に数えられている。そのころの英語雑誌に、「記事文、叙事文の見地より言えば、吾人は井上十吉氏あるを忘るべからず。書簡文学より言えば、当時神田男爵の右に出づるものなかるべし。しかし純文学においては、和田垣博士の覇者たる地位は動かすべからざる所ならん」と評している」と紹介した上で、「もし彼が英文学で立っていたならば、漱石以前に一流の英文学者が日本に出現していたかもしれない」との高い評価を和田垣に与えている。⁴⁾ また、日本の教育史研究においては、明治二十年代に現れた私立の商業学校の代表例である東京商業学校の校長であったことにより、草創期の民間における商業教育の関係者として、その名が言及されている。⁵⁾

それでは、本稿に最も関係する日本の経済思想史研究においては、これまで和田垣についてどのような評価が与えられてきたのであろうか。端的に言えば、経済学者としての和田垣の評価は、明治中・後期におけるドイツ新歴史学派経済学、就中、その社会政策論と財政学の日本における最初期の紹介者・主唱者ということであり、さらに言えば、この時期の日本のアカデミズムにおける経済学分野でのドイツ学輸入の推進者の一人ということに尽きていると言つていい。例えば、住谷悦治はその社会政策論の紹介者としての和田垣について次のように評している。

社会政策思想史上、和田垣謙三は、金井延その他社会政策学会の諸学者に比較して、あまり高く評価されていない

い。

ともあれ、日本社会政策思想の歴史は、まず和田垣謙三の紹介的な社会政策思想の源流から始めなければならな

い。

和田垣は一八八八年(明治二年)三月十五日発行の『国家学会雑誌』第二卷第十三号において、問題の論文「講壇社会党」なる論文を公けにした。ここで自らドイツにおいて影響を受けてきたワグナー、シュモラー、ブレンタノ、アドルフ・ヘルド、エルウィンナッセ、シェーンベルヒ等、いわゆるドイツ新歴史学派経済学者によって創立されたドイツ社会政策学会の思想を、詳細に紹介論述したのである。：

和田垣が：「ドイツの」カテデール・ゾチアリスムスを日本語で「講壇社会主義」の訳字を当て、彼らの一派を「党」と見なして、「講壇社会党」なる日本語「学術用語」として創始したことは意味が深く、これによつて彼は、わが国の社会政策思想史上記録に値いするものとなった。しかも、東京帝国大学の典型的官僚的性格をもつ『国家学会雑誌』に、「講壇社会主義」なるものを紹介したのみでなく、熱意を持つて肯定的にとりあげたことは注目すべきものがあつた(「」内は筆者、以下同)。

また、大淵利男はその財政学の紹介者としての和田垣について次のように述べている。

和田垣謙三、その名は、明治二十年(一八八七年)三月十五日発兌の『国家学会雑誌第壹号』において『財政学大意』を発表し、ドイツ財政学の導入と普及に貢献したということ、および明治三十五年(一九〇二年)五月、伊国ルイギー、コッサ原著 独国カー、テー、エーヘルヒ独訳 日本法学博士和田垣謙三重訳『財政学 全』(洋一)として、…これを刊行しているということ、において、わが国財政思想史上において不朽である。いうまでもなく

『財政学大意』は、…「財政学ノ釈義」、「財政学ノ職掌」、「財政学ノ分科」、「財政学ノ地位」、「財政学ト他ノ国家学トノ関係」、「財政学ヲ修ムルニ当リ傍ラ研究スヘキ学科」、「財政学ノ緊要ナル事」、「財政学沿革」など『財政学一斑』をいちはやくわが国に紹介したものととして、歴史的意義を有するものである。そしてコッサの『財政学第一要綱』（『財政学 全』の原著）は、…イタリアで二番目に『財政学』の名を冠したもので、ワグナー(Adolph Wagner)『財政学』(Finanzwissenschaft, 1877-1901)のイタリア版とまでいわれるほどにワグナー財政学に依拠しており…和田垣謙三重訳になるエーエベルクの訳本は、…必ずしも忠実な翻訳ではないが、コッサの所論を伝えるには十分である。^②

しかし、当然のことながら、以上のような評価は経済学者としての和田垣の存在そのものを十分に説明したことにはなっていない。事実、近年、明治中期における「日本の社会科学思想における親ドイツ的傾向のはじまりを示す」ものとして和田垣を捉えることを疑問視する見解も出されているのである。^③

こうした従来の研究に欠如しており、かつ、これから筆者が試みようとするのは、和田垣の生涯に即した伝記的研究であり、彼が活躍した明治中期から大正期にかけて日本の経済学界において果たした役割を、より広く概観することである。特定の一論文や一著書に彼を代表させて、つまりある部分によって彼を性急に説明し、「解決」してしまうのではなく、その前提となる諸々の事実をなるべく詳細に拾い上げて集め、経済学者としての和田垣の存在をそのものとして再構成する基礎的な作業である。冒頭に述べたような、その存在の重要性にもかかわらず、自伝や本格的な伝記のない和田垣の場合、このような作業の意味は決して少なくないと思う。^④

本稿では以上のような意図から、まずその第一歩として、経済学者としての和田垣の経歴とその活動を、収集し得た資料から可能な限り明らかにし、これを紹介することを課題としたい。

2、豊岡から上京―ドイツ語から英語へ―

和田垣謙三は万延元（1860）年、但馬国豊岡藩（現在の兵庫県豊岡市）に和田垣謙の次男として生まれている¹⁰。父は豊岡藩の札場奉行、産物奉行などを務めた藩士であった。なお、河本重次郎によると、長兄の名は伊之助といい、また弟（氏名不詳）もいたが、弟は大阪に出て早世し、また父と長兄は後に上京して、一時、商店を営んでいたがあまり振るわず、そのうちに両者とも亡くなったという¹¹。

和田垣は幼時より読書を好み、長じて久保田精一の門に入った。久保田は天保13（1842）年、豊岡藩士の家に生まれ、文久元（1861）年に江戸勤番を命ぜられると、この間、安井息軒、大橋訥庵らの門に学んだ。帰国後、今度は「但馬聖人」と称された池田草庵の家塾、青谿書院に入門、ついで慶應2（1866）年に藩学稽古堂の学長に任ぜられた。稽古堂は明治4（1871）に廃藩とともに廃校となり、久保田はその後、文部省に出仕するが、明治11（1878）年に退官、芝増上寺内に私塾成蔭舎を開校する。明治14（1881）年に帰郷、旧藩士の師弟の教育のために設けられた宝林義塾の塾長を務め、明治18（1885）年に同校が廃校となると、私邸に成蔭舎を復活するなど、生涯を教育者として活躍した人物である¹²。

和田垣が久保田に入門したはつきりとした時期は分らないが、河本の回想によれば、稽古堂が廃校し、久保田が親戚の家にあたる小井田神社に仮居していた時期に和田垣とともに通学していたという¹³。そこでの教育の様子について河本は次のように述べている。

…今は生徒と云ても、唯数名、習学に來たりしのみ、其節余は、元明史略と宋名臣言行録杯まきを学び、覚えの悪き為め能く譴責された、之に反し、和田垣君は遙に秀才で、覚えも能く、先生が余り癩癩の強い為め、非常に憤怒さるる毎に、余は和田垣君杯まきより一段多くしかられ、又恐怖を懷き居れり…¹⁴

この頃から和田垣の優秀さが周囲に際立っていたことが分かるが、さらに明治4（1871）年には医師の菊池武文という人物についてドイツ語を学んでもいる。まだ幼い和田垣に誰がドイツ語の学習を勧めたのかは定かではないが、ちょうどこの頃は普仏戦争（1870〜71年）でプロシアが勝利し、ドイツ帝国が建設されるに及んで、その強盛がわかにはわが国の人々にも注目され、さらに同じ頃、明治政府がドイツ医学に範を取ることを決定したことが大きく影響して、医学志望者を中心にドイツ語学習者が急激に増加し、ドイツ語熱が一挙に高まった時期にあたる。そうしたドイツ語隆盛の氣運が豊岡にも伝わっていたのだろうと思われる。¹⁵

さて、明治5（1872）年、この年は和田垣にとって人生の最初の転機になった年である。すなわち、この年の5月、和田垣は同郷の先輩である吉村寅太郎に連れられて、猪子止戈之助いのこしかのすけ、河本とともに上京したのである。和田垣は赤坂に住んでいた叔父のもとに身を寄せ、すぐに猪子とともに本郷にあつた壬申義塾に入学してドイツ語の学習を再開する。¹⁶ 壬申義塾は大熊春吉がこの年の2月に開校した独逸学塾で、先述のようなドイツ語熱を背景にこの時期の東京にはドイツ語を教えるいわゆる独逸学塾が相次いで生まれ、その数は約30にも及んだが、多くは短命に終わり、明治10年頃までにほとんど姿を消す中、大熊の確固たる方針の下、明治30年代半ばまで存続した例外的な塾であつた。さらに和田垣は、同じ年、同じ本郷の地に橋機郎が開校した進文学社にも入学している。進文学社は英語とドイツ語を教授していた私塾で、森鷗外が初めてドイツ語を学んだことでも有名な塾である。¹⁷

和田垣は壬申義塾、進文学社でドイツ語の習得に励む一方、先に上京していた久保田精一のもとへも時々顔を出していた。この頃、久保田は輔仁社という漢学塾を開いていたが、ここには猪子、河本らも通っており、おそらくは上京した豊岡出身者が同郷人同士、交流を保つ場でもあったのだろう。¹⁸⁾

つづいて和田垣は東京外国語学校を経て、開成学校に入学する。東京外国語学校は、明治6(1873)年、開成学校の語学部門と外務省が所管していた語学校を合併して開設され、英、仏、独、魯(ロシア語)、清(中国語)の五学科より構成されていた。このような設立の経緯から、開設当初の同校は開成学校の一部と見なされ、開成学校の予備校の性格と、通訳養成のための学校という二重の性格を持たされていたという。和田垣は開成学校へ移るまでの間、この独逸語科に在学していたのである。ここで開成学校の歴史についても簡単にふれておく必要がある。明治元(1868)年、開成所を改正して開成学校とし、大学校、大学南校、南校、第一大学区第一番中学を経て、明治6(1873)年、再び開成学校と称し、明治7(1874)年、東京開成学校となっている。そして明治10(1877)年に東京大学が設置され、これに合併されるまでの間、同校は校名だけでなく、組織や教育内容などもめまぐるしく変化しており、和田垣もその影響を受けずにはいらなかった。¹⁹⁾

開成学校に入学後、和田垣はドイツ語と鉱山学を専攻している。年少時より親しんできたドイツ語はともかくとして、なぜ鉱山学を専攻することになったのであるのか。実は、これには開成学校における教育方針の大きな変化が関係していた。開成学校は発足直後、外国語教育と学科の編成について重要な変更をおこなっている。第一は語学の種類について、主として財政的な理由により英語専用の方針を立てたことである。これは英独仏の三か国語のいずれかによって教育をおこなうとする大学南校以来の方針に対する重要な変更であった。第二にこの方針を受けて、英語による法学、理学、工業学の三つの専門学科と、諸芸学、鉱山学という二つの付随的な学科が設置されることになったが、後者の二学科のうち、諸芸学科は英語に転ずることが困難なフランス語の生徒のために、また鉱山学科は同じ事情にあるドイツ語

の生徒のために設けられたものであった。²⁰⁾ このことについては木場貞長が後に次のように回想している。

和田垣君と私とが鉱山学科に入つて研究したといふことは、余程奇異の思をなさる方もありません。鉱山学科と申すと、技師にでもなる知識を得る学科であります。和田垣君と私は技師になるやうな考えもなく、又其様な科学的な問題に就ての頭脳を持っている訳もありませんでしたが、かくも方面違ひの学科を選んだといふのは、何故であるかと申しますと、是は止むを得ない事情が伏在したのであります。

当時に於ける開成学校にて、独逸語を以て教授する学科は、医学と「原文のママ」鉱山学の二科のみでありました。それで医者になる志望の人の外は、大抵鉱山学科を選択したのであります。実は私なども、日本の陸軍は将来独逸式に改まるといふ評判があつたので、独逸語を学んで居たならば、必ず有望であらうと思つて、独逸語を研究する為めに全く方面違ひの鉱山学科などに入学したのであります。²¹⁾

彼らが学んだ当時の鉱山学予科の時間割を見ると、算術、博物学、代数学、幾何学、地理学、画学、科学、物理学、語学、翻訳、体操といった科目が並んでおり、当然、そのほとんどはいわゆる「お雇い外国人」教師による授業であつた。²²⁾ところが、この鉱山学科は最初の予科生が本科へと進級するはずであつた明治8（1875）年に諸芸学科とともに廃止され、新たに物理学科、化学科の二科が設置された。これにともない、同校の語学は英語に統一され、それまでの鉱山学、諸芸学両科に所属していた予科生に対しては、①物理学が化学のいずれかを専修するか決め、志願すること（どちらも専修する希望がない者は随意退学を許し、貸費生については貸費金の返還を免除）、②仏・独語から英語に転じたいと希望する者は、特に英語を教授した上で、物理学又は化学の相当の級に配属させること、③東京医学校又は東京外国語学校に入学を希望する者は、希望校に入学を許可し貸費を継続すること、という三つの選択肢を用意する措置がと

られた。その結果、和田垣が所属していた当時の鉱山学予科生の進路は次のようになった。²³⁾

- (1) 新設化学への進学希望者 6名
- (2) 英語への転換希望者 14名
- (3) 東京医学校・外国語学校への転入を希望する者 19名
- (4) 退校希望者 7名

和田垣はこのうち英語への転換を選んだ。この間の事情について、橋南漁郎の「東京開成学校の改革」という文章を引用しておきたい。

…明治九年「原文のママ」、東京開成学校改革…英学部のみを存して、仏学部及独逸学部を廃止するの方針を定めた。於是乎仏独二学部にいた連中は、旧来の着衣を擺脫して、別に新衣を纏はざるべからざる場合に際会したが、彼等の中には随分思ひ切つた着替へ方をしたものが少なくない。当時…独逸学部（鉱山学部〔原文のママ〕）には中澤岩太、和田維四郎、中村弥六、下山順一郎、佐藤三吉、和田垣謙三、木場貞長等の連中がいた。…下山、佐藤等は医学部「東京医学校のこと」…に転じ、中澤等は英理学部に転じ、和田垣、木場等は英文学部に転ずることに定めた。…大体に於て各、転医、転英することに取り決めた。…和田垣や木場が鉱山から文学に転じたなどは、頗る思ひ切た変り方であると思ふ。²⁴⁾

引用文中にある「英文学部」とは、この学科改編による英語への転換希望者のために臨時に設けられた予科の「転英学」の学級をさすと思われる。和田垣はこのクラスに所属した後、明治9（1876）年に新たに普通科が設置されると、さらにここへ所属したと推測される。この普通科は、それまで志望学科別に在籍して学級などを編成していたそれ

その予科（ただし教育内容は各学科共通）を統合して設けたものらしく、翌年に東京大学が新設されると、その予備門の母体となった課程である。そのカリキュラムを見ると、英語学を筆頭に数学、地理学、史学、物理学、化学、博物誌、画学、理学（心理学、修身学）、経済学が並んでおり、これはアメリカのハイスクールの影響を強く受けたものであるとされている。²⁶⁾ この時期のことを木場は次のように述べている。

…然るにその後制度が一変し致しまして、開成学校が改称されて東京大学となりましてから「原文のママ」、凡てが英語でやるやうになりましたので、鉱山科と諸芸科「原文のママ」の学生は、折角習つた独逸語を捨てて英語をならなければならぬといふやうな始末でありました。それから其後臨時転英科といふ学級が設けられるやうになりました、其処で特に英語を研究することになりました。…

それから半年程経ちまして、大学予備門の前身である大学予科といふのに入り、それを卒業して明治十年に二人は同時に大学に入学することになり、その時丁度私が十九で、和田垣君は十八でありました。²⁶⁾

引用文中にある「大学予科」とは先述の普通科のことであると思われるが、こうして和田垣は、開成学校の教育方針の変転にいわば翻弄されながら、ドイツ語から英語へと専攻する語学を変更することになったのであった。

3、経済学への道―東京大学から欧州留学へ―

明治10（1877）年、東京開成学校、東京医学校を統合して文部省所管の下に法学、理学、文学の各学部よりなる

東京大学が創立され、和田垣は文学部第一科（「史学哲学及政治学科」）に進学した（なお、第二科は「和漢文学科」であった）。なお、当時の東京大学文学部は、広く社会科学までの諸学問分野を包含する学部であったことに注意する必要がある。このことを高田早苗は次のように回想している。

東京大学文学部というのは、文学ばかりを専攻させる所ではなくして、政治学、経済学、哲学、英文学、国文学、漢文学及び歴史などを教へる所であつた。尤も大体には二つに区別され、政治学、経済学及び文学を専攻するものと、政治、経済の代りに文学を合わせて哲学を研究するものとの二種類になつて居た。そして日本の美術、特に絵画を外国に紹介したことで有名になつたフェノロサ君の如きは、政治学と経済学と哲学とを一人で教へて居た。即ち此の人は、一方にミルの経済原論や、リイバー又はウルシーの政治学を講義すると同時に、カント、ヘーゲルの哲学を講授するのであるから、今日から見ると、当時の学科程度は余り高いものでなく、大学の課程とは言ひ條、半ばリベラル・エジュケーションと見て然るべきであつたとも言へよう。²⁷⁾

実際、当時の文学部（第一科）のカリキュラムを見てみると、次のような科目が並んでいる。²⁸⁾

・ 第一学年

英語（論文）、論理学、心理学（大意）、和文学、漢文学、フランス語またはドイツ語

・ 第二学年

和文学、漢文学、英文学、哲学（哲学史・心理学）、欧米史学、フランス語またはドイツ語

・ 第三学年

和文学、漢文学、英文学、哲学（道義学）、欧米史学、政治学、経済学

・第四学年

英文学、欧米史学、哲学、政学及び列国交際法

さらに文学部開設時の教員陣容を見てみると、教授としてはエドワード・W・サイル(担当は史学および道義学、以下同)、ウイリアム・A・ホートン(英文学)、外山正一(心理学および英語)、講師としては中村正直(漢文学)、横山由清(和文学)、信夫繁(漢文学)といったメンバーで、翌明治11(1878)年にはフェノロサが着任し、当初は主に政治学と経済学(のち理財学と改称)を担当した。²³⁾

ここに入学した和田垣は、ホートンの講ずる英文学に興味を持ち、シェークスピアの『リア王』を『李王』と題して漢訳したり、また漢文を担当していた中村正直(敬字)の影響でキリスト教にも関心を向けるようになり、後の英国留学中にはケンブリッジで洗礼を受けている。²⁴⁾しかし、その後の和田垣の人生の進路を大きく決定づけたのは、この時期に経済学を自らの専攻に選び、本格的に学び始めたことである。そして、この和田垣の選択には、同郷豊岡の先輩であり、当時、東京大学総理補として同校の教育行政を指導していた浜尾新の強い勧めがあった。三宅雄二郎(雪嶺)はこの間の事情を次のように述べている。

浜尾は但馬豊岡の出で、豊岡の後進に和田垣謙三がをり、浜尾はこれに見込みをつけ、なるべく引き立てようとした。∴和田垣は大学内の秀才であり、浜尾は出来るだけ立身させようとして経済学をやらせた。経済学ならば直ぐ洋行させ得るのであって、それで和田垣にすすめ、和田垣は「は」乗気になり熱心に経済学を修めた。当時経済学は理財学と称し、文学部で哲学、政治学、理財学三科中の二つを兼ねべきに定まり、和田垣は理財学と哲学とを修めた。²⁵⁾

しかし、和田垣にとつて浜尾の存在は単に同郷の先輩であり、いち早く和田垣の才能を認めて経済学者への道筋をつけた人物というだけでは済まないものがある。実は浜尾はその後も、問題多く、脱線気味の和田垣を、終生、庇護し続けた後見人のような立場になった存在だからである。そのように、和田垣の人生にとつて重要な、最も関係深い人物である浜尾新とはいったいどのような人物であつたのだろうか。浜尾は嘉永2(1849)年、豊岡藩士の子として江戸の同藩邸内に生まれ、明治元(1868)年には藩費遊学生に選ばれ、大阪の瓊江塾に入門、さらに翌年、吉村寅太郎らと上京し、慶應義塾、達理堂、大学南校に学んだ。その後、横浜高島学校や共償義塾などの教員を経て、明治5(1872)年に文部省に出仕、南校舎中監事に任ぜられる。そして、以後の浜尾の人生は、これを前身とする東京大学の歴史と切り離すことはできない。アメリカ留学から帰国後、明治7(1874)年に開成学校監事、翌年には東京開成学校長補となり、東京大学創立と同時に綜理補に就任、綜理の加藤弘之を補佐する立場で、同校の教育行政に携わつた。明治26(1893)年には第三代の帝国大学総長に任ぜられ、明治30(1897)年までその職にあり、さらに明治38(1905)年に総長に再任、大正元(1912)年まで在任した。この間、元老院議員、貴族院議員、文部大臣と頭職を歴任し、最後には枢密院議長も務めた。つまり、浜尾は日本の近代教育制度の建設期を代表する教育官僚の大物の一人であつたわけである。⁽²⁾

こうして和田垣は経済学者への道を歩み始めることになつたが、ここで東京大学の草創期における経済学教育の歴史についてもふれておく必要がある。先に見たように和田垣が入学した文学部第一科に「経済学」の授業科目が設置され、明治11(1878)年よりフェノロサが実際に講義を開始した。冒頭に述べたように、これが官学における最初の経済学講義とされており、和田垣が受講したのもこの最初の講義である。明治12(1879)年に第一科が「哲学政治学及理財学科」に改編され、経済学は「理財学」と改称されるとともに史学に代わつて政治学、哲学と並ぶ専攻として

の地位を与えられることとなった。さらに明治14（1881）年には文学部は三学科制となり、第一科（哲学科）、第二科（和漢文学科）と並んで第三科（政治学及理財学科）が設置され、この年、田尻稻次郎が講師を嘱託されて着任した。そして、これ以降は東大の経済学教育における「フェノロサ―田尻時代」と表現されている時期にあたる。³³ それでは和田垣が初めて本格的に接した経済学であるフェノロサの講義とはどのような内容のものであったのだろうか。これについては、文部大臣に対する「申報」として彼自身の手による講義報告（明治十一年度）が残されているので次に引用しておく。

本科ニ於テハ専門学ノ基礎トシテ一層深奥ニ涉レル学旨ヲ知ラシムルヲ要ス。因テ先ツ生徒ニミル氏ノ理財原論ヲ授ケ其過半ヲ日々暗記セシムルヲ努メ漸ク之ニ熟習スルノ後更ニ授クルニ他派名家ノ著セル同書ヲ以テセリ。即チ其首タル者ハケアリー及ヒケアンズノ著書等ナリ。次ニ専ラジェボンズノ貨幣論ヲ攻修セシメ更ニ此説ヲウオル「カル等ノ貨幣説ト対照シテ両端ヲ叩カシメ之ヲ終フルニ万国商業説ノ解釈及ビ自由交易保護主義ノ大要ヲ以テセリ。³⁴

ここからは、ミルの『経済学原理』を基本テキストとして、その内容を暗記させるまで学習させ、その後、ケアリー、ケアンズ、ジェボンズらの学説を比較対照しながら紹介するといった講義内容であったことが窺えるが、ミル、ケアンズら古典派経済学の代表的な論者の著作だけでなく、保護主義を主張するアメリカ国民主義経済学（「アメリカ体制」派経済学）の完成者とされるケアリーが講義されていること、さらにはイギリスにおける限界効用理論の提唱者であるジェボンズの学説が紹介されていることなどが特に目を引く点である。³⁵

以上のように浜尾から勧められて、経済学者への道を歩み始め、フェノロサから経済学の最初の手ほどきを受けた和田垣は、明治13（1880）年、東京大学文学部を「理財学、哲学」専攻で卒業し（第一回文学部卒業生8名中、首席

卒業であった³⁶、直ちに欧州留学の途についた。和田垣はまずイギリスのロンドン大学に、つづいてケンブリッジ大学のキングス・カレッジに学び、これらの大学でフォックスウェル (Herbert Somerton Foxwell)、レヴィー (Leone Levy) らについて経済学を専攻したとされる³⁷。しかしながら、ここで和田垣はこれらの大学における経済学の講義に大きな失望を味わったようである。その理由については木場が次のように説明している。

和田垣君は英国で第一に感じたことは同国に於ける大学の講義振の詰らぬことでありました。それもその筈でせう、君は日本の大学に居る中に相当の教師に就て経済学を研究し、且つ英文の原書で、経済に關するものは大抵破したのであります。それで英国の大学に入つて見ますと、自分の研究せんとする経済学の講義は、宛然自分が學生に教へる位の程度でありましたから、其程度は至つて低く、且つ詰らなかつたのでありませう。

其頃の日本の大学では一定の教科書といふものがなく、教師が二三の学説を比較して之を教壇で講義するのでありますから、参考のために必要な原書も學生は盛んに読みました。それであるから当時の學生の知識の程度も高く、卒業生の学力と申せば、今日の学士などはとても足元にも及ばぬ位でありました。況んや和田垣君に於いては特に勉強家で、熱心に参考書なども読破して居りましたから、英国の大学に參つても、耳新しい講義を聴くことが出来なかつたので、多少失望の感もあつたらうと思ひます³⁸。

また阪谷芳郎は、当時のイギリスの大学の学風について、「人物を養成するのが眼目で學問に重きを措かず、又其の講義は程度の低いもの」であり、日本の大学はドイツ風に學問に重きを置いたから、「日本の大学を卒業して洋行する人は、独逸大学では新しい進歩した大學説を聴くことが出来ますが、英国大学では余り耳新しい知識を得られない様に感じたくもしれません」として、英独それぞれの大学の学風の違いがその背景にあつたことを示唆している³⁹。結局、経済学を

学ぶために留学したにもかかわらず、イギリスの大学における経済学教育の水準に失望した和田垣がイギリス滞在中に最も力を注いだのは、学生時代から熱中していた文学であった。木場の回想を続けよう。

斯く君は劍橋^{ケンブリッジ}大学に於て聴講生として講義を聞いて居つたにも拘らず、右にいふやうな次第でありましたから、自然其力を他に注ぐやうになつたのであります。即ち君の性質上非常に趣味を感じた文学方面の研究に發展するやうになりましたのは無理ならぬことと思ひます。それで劇場に行つて見たり、ピアノを弾いたり、英詩を作つたり、或いは日本の和歌を英訳して英国人に紹介することなどに時間を費しました。⁴⁰

同様のことを井上十吉も次のように述べている。

私が和田垣博士に初めて会ひましたのは、明治十三年の暮か十四年の初倫敦に於ける日本人の集会の席上であつたと思ひます。斯かる関係からして、段々懇意を重ねまして、それから博士は明治十五年に劍橋^{ケンブリッジ}大学に入学されて、経済学を研究されました。：其頃でも博士は、なかなか英文の才能があつたので、盛んに留学中に、日本文や漢文を英文に訳して、其の技倆を發揮してそれを非常に楽しんで居られました。それで赤壁賦なども英訳したこともありました。斯くの如く博士は、青年時代から文章の才が備はつて居りましたから、経済学の方よりも、文学の方が得意でありまして、好んで其の方面のことを研究されたやうであります。⁴¹

なお、和田垣は官費生の身分で留学していたが、ケンブリッジ大学には正式に入学したわけではなく、聴講生のような資格で在籍していた。和田垣と同時期にケンブリッジ大学に学んでいた末松謙澄は「和田垣君は同大学に入学はした

が、規則立って入学して研究した訳ではない。只聴講生といふ資格でフォックススウェル氏に就て、経済学の講義を聴いて居た。従つて試験を受けるといふこともなければ、又卒業するといふこともないのである」と証言している。⁽⁴⁾

さらに和田垣は、明治16（1883）年にドイツへ渡り、ベルリン大学でワグナー（Adolph Heinrich Gotthilf Wagner）、シュモラー（Gustav von Schmoller）らについて再び経済学を専攻した。ワグナーとシュモラーは言うまでもなく、ドイツ新歴史学派経済学の泰斗で、ドイツ社会政策学会の有力メンバーである。社会政策学会は1873年に結成され、ワグナー、シュモラーに加えて、ロッシャー（Wilhelm Roscher）、ヒルデブランド（Bruno Hildebrand）、ブレンターノ（Lujo Brentano）といった当時の錚々たる（新旧）歴史学派の経済学者が結集していたが、学会の實際的指導はシュモラー以下の新歴史学派の世代が担った。彼らの多くは60年代にはドイツ・マンチェスター派の熱心な支持者であつたが、ドイツ帝国建設時代のナショナリズムの高揚の中で、「社会問題」の存在を重視し、経済への国家的干渉を認める立場へと変化していった。こうして自由放任主義と樂觀的な社会調和論の立場から「社会問題」の存在を否定するドイツ・マンチェスター派に対抗しつつ、政策勧告と調査研究を行う非政党的な団体として組織されたのが、社会政策学会であつた。学会メンバーには、大学教授の他、開明的な官僚・企業家、労使協動的な労組指導者も参加していたが、彼らの基本的な立場はプロイセンの立憲君主主義的官僚政治に信頼を寄せ、開明的官僚が社会政策を実施することによつて社会主義革命を防止するという目的で一致しており、こうした立場はドイツ・マンチェスター派によつて「講壇社会主義者」と揶揄され、マルクス主義者からは反革命的と批判されることもなつたが、その政治的な影響力は大きなものがあつた。社会政策学会は設立当初こそ労働問題に焦点を当てていたが、次第にその対象領域を拡大していき、税制改革、通商・関税政策、農業問題、手工業・問屋制家内工業問題、カルテル問題といった広範な社会・経済政策が討議され、調査されることとなつた。したがつて、彼らにとつての「社会政策」とはそうした社会・経済上の諸問題を解決し、社会の安定化を目的とした社会政策・経済政策の総体を意味していたことに留意する必要がある。⁽⁵⁾

和田垣のドイツ滞在中の様子はよく分からないが、帰国後の明治21(1888)年に発表した論文「講演社会党」は、このドイツ留学中における、これら新歴史学派経済学の台頭とそれに指導されていた社会政策学会の活動の影響を抜きにしてはあり得ないことは、既に冒頭に引用しておいた住谷の指摘で十分であろう。本論文の内容についての詳しい紹介と検討は次号以降に譲るが、この論文の末尾に彼がわざわざ付け足した「附言」と題された文章は、和田垣がドイツにおける学者の社会的な地位と役割について極めて強い印象を受けたことを率直に披瀝したものとなっている。

余ハ序ニ茲ニ附言シタキコトアリ何ゾヤ曰ク学者ニ属スル荣誉トソノ占ムル所ノ位置是ナリ独国ノ国家学者ハ其名ヲ以テスレバ即チ学者タルニ過ギザルナリ教授タルニ過ギザルナリ然レドモソノ隠然タル勢力ノ波及スル所ヲ以テ之ヲ視レバ豈独リ大学ノ教授タルニ止マランヤ上ハ宰相大臣ヨリ下ハ天下公衆ニ至ルマデ皆ナソノ教授ヲ蒙ラサルモノナク而シテ其之ヲ為スニ方リテヤ不羈独立利ノ為ニ偏セズ私ノ為ニ党セズ確乎タル精神ハ能ク上ニ諂ハズ亦故ラニ之ニ悖ハズ民ニ諛セズ亦故ラニ之ト争ハズ小心翼翼々真理ノ所在ヲ探求シ敢テ其結果ノ如何ヲ顧慮セズ正シキハ堂々之ヲ唱ヘ正シカラザルハ侃々之ヲ駁シ儼然トシテ能ク官民ノ間ニ中立シ否ナ官民ノ上ニ社会ノ外ニ聳立シ社会ノ奴雁タルノ職務ヲ完クシソノ常ニ講壇ノ上ヨリ吐キ出ス警誡注意ノ言論ハ恰モ天使ノ雲間ヨリ発スル神託ノ如ク宰相モ耳ヲ敬テ茅屋ノ主人モ耳ヲ敬テ外国ノ土人モ耳ヲ敬テ皆聳然トシテ傾聴セザルハナクソノ世道ヲ補益シ天下国家ノ運動ノ方針ヲ指示スルニ功アル敢テ一步ヲ国会議院ニ譲ラサルナリ否ナ一人ノ侃々ハ群集ノ囂々ニ比シテ寧ロ重キ所アルモ決シテ輕カラザルナリ否此ノ如キ学者ニ富メル邦国ハ噫亦幸ナル故⁴³

十九世紀の間、ドイツにおける世論を最もリードしたのは大学教授であり、それは世紀初頭のフイヒテ、ヘーゲルに始まり、三月革命期と60年代の国法学者や歴史学者を経て、社会政策学会に集結した経済学者に至る、いわゆる「学者

政治 (Gelehrtenpolitik)」の展開の歴史に見てとれる。大学教授は、その教え子である教養層、特に官僚とともに、正義と真理に基づいて公共性を担っているという彼らの強烈な自負がその背景にはあった。例えばブルンチュリ (John Casper Bluntschli) は、小市民・農民・労働者などの「第四身分の本来の民衆階級」から区別され、「高度の教養」と「自由な職種」によって特徴づけられた、「国民の政治的洞察の自然的機関」たる「第三身分」の意見こそが世論である、としていたが、言うまでもなくこの「第三身分」の筆頭こそが大学教授であった。パウルゼン (F. Paulsen) はもっと端的に「大学は全体として、内外の政治の善悪に関して民族の公共的良心のようなものであり得る」、「冷静な」熟慮の中に生きている大学は、権力による誘惑、党派の欲望や党派の憎悪による混乱にさらされることが少ない。まさにそれゆえに、大学は、権力の行為を理念により測る資格がある」と喝破している。⁴⁵⁾

社会政策学会も政党との連携を求めず、会員の意見も多様であったが、単なる純粹な学術的団体として設立されたのではなく、実際の政策決定へ影響力を行使し、世論を喚起・啓蒙するという実践的な目的をもっていた。トマス・リハは「ヒスマルクの社会政策の形成に対して学会がどの程度影響を及ぼしたかを確定することは難しいとしても、政府官僚が個人的に学会の会員資格を持ち、また指導的政治家と学会指導者とのあいだに個人的な絆があったことによって、直接間接に学会が果たした役割は実際に存在したし、しばしば決定的であったと考えられる」と述べている。⁴⁶⁾

右記の引用文中における「不羈独立利ノ為ニ偏セズ私ノ為ニ党セズ」、「上ニ詔ハズ亦故ラニ之ニ悖ハズ民ニ諛セズ亦故ラニ之ト争ハズ」、「儼然トシテ能ク官民ノ間ニ中立シ否ナ官民ノ上ニ社会ノ外ニ聳立シ」、「ソノ世道ヲ補益シ天下国家ノ運動ノ方針ヲ指示スル」という和田垣の表現は、こうした当時のドイツの大学教授の有り様を的確に表現したものであったといえるであろう。

(以下次号)

- (1) 最近でも、例えば谷沢永一が「酒飲みの流儀、和田垣謙三博士」と題した小文でこの種の逸話を紹介している(谷沢『えらい人はみな変わってはる』(新潮社、20002) 97〜98頁)。
- (2) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史 一』(東京大学出版会、1986) 876頁。
- (3) 杉原四郎「浜田健次郎と東京商業学校」51頁、杉原『日本の経済思想史』(関西大学出版部、2001) 所収。
- (4) 高梨健吉『文明開化の英語』(1978、中公文庫、1985) 152〜157頁。
- (5) 三好信浩『日本商業教育成立史の研究—日本商業の近代化と教育—』(風間書房、1985) 409〜410頁。
- (6) 住谷悦治『日本社会政策学派の形成—金井延と桑田熊蔵—』124〜127頁、住谷ほか編『講座・日本社会思想史1 明治社会思想の形成』(芳賀書店、増補版1969) 所収。
- (7) 大淵利男「和田垣謙三の財政思想とその展開」397〜399頁、『日本大学法学部 創立百周年記念論文集(第一巻)』(日本大学法学部、1989) 所収。
- (8) 水田洋「経済学事始—その明治日本への導入—」247、252頁、水田『思想の国際転位—比較思想史的研究』(名古屋大学出版会、2000) 所収。
- (9) 和田垣に関する基本的な伝記資料としては次のようなものがある。
- ① 大町桂月編『和田垣博士傑作集』(至誠堂書店、1921)
- 「附録」として「和田垣博士伝」、「諸名士追懷録」、「和田垣謙三博士年表」、「著作一覧表」などが収録されている。この「和田垣博士伝」は大町の手によるものであり、現在確認されている唯一の伝記であるが、わずか15頁にも満たず、叙述の大半も大町自身と和田垣の交遊の回想などにあてられており、伝記としての価値は乏しい。しかし、「諸名士追懷録」には三十名に及ぶ人々が和田垣に関する回想を寄せており、また「和田垣謙三博士年表」、「著作一覧表」も、不十分・不正確な箇所が散見されるが、その経歴を調査する上で最も重要な基本資料となっている。
- ② 花房吉太郎・山本源太編『日本博士全伝』(1892、日本図書センター、復刻版1990)
- 「法学博士和田垣謙三君」として、約2頁半にわたって本書の発行年である明治25年までの経歴が比較的詳細に記述され

ている。

③ 澁木直一（発行人）『吐雲餘影』（1934）

昭和8（1933）年に和田垣の墓碑が建立されたのを記念して発行された小冊子で、十五名の回想が寄せられているが、内容的には『和田垣博士傑作集』の「諸名士追懷録」と重なっているものもある。

なお、以下の叙述で和田垣の経歴における基本的な情報は、特に注記がない限り、①の「和田垣謙三博士年表」と②の記述に依る。

(10) 註(9)の①の「和田垣謙三博士年表」は6月14日生まれ、②は7月14日生まれ、としている。

(11) 河本重次郎『回顧録』（河本先生喜寿祝賀会事務所、1936）17頁。

(12) 豊岡市史編集委員会編『豊岡市史 下巻』（豊岡市、1987）773頁。また池田草庵および青谿書院については、豊岡市史編集委員会編『豊岡市史 上巻』（豊岡市、1981）930～933頁、兵庫県教育会編『兵庫県教育史 藩学、郷学、私塾、寺子屋篇』（1943、第一書房、復刻版1981）343～348頁などを参照。

(13) 前掲河本『回顧録』49頁。

(14) 前掲河本『回顧録』49～50頁。

(15) 上村直己「明治初年の東京のドイツ語塾について」49頁、『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第20号』（1985）所収。また、河本は上京後にドイツ語学習を始めた動機について、「叔父〔中江種三（造）〕の云ふには、独逸が仏国に勝たから、今後独逸学が盛になるであろうと云ふのである、他に何の意味もなく、況や医者となり、目医となる杯とは、其節夢思わざりしなり」（前掲河本『回顧録』52頁）と述べている。

(16) 前掲河本『回顧録』49、67、115頁、および宿南保『浜尾新』（吉田学院・豊岡総合技芸学院、1993）144、148頁。なお、河本『回顧録』では上京の年を明治4年としているが、ここでは宿南『浜尾新』の記述にしたがった。

(17) 壬申義塾については上村直己「大熊春吉と壬申義塾」、上村『明治期ドイツ語学者の研究』（多賀出版、2001）所収、進文学社については宮永孝「日本におけるドイツ語教育の沿革」、宮永『日独文化人物交流史―ドイツ語事始め』（三修社、1993）所収、をそれぞれ参照。

(18) 前掲河本『回顧録』65～67頁。

(19) 和田垣が東京外国語学校、開成学校へそれぞれいつ入学したのかについては、註(9)の①の「和田垣謙三博士年表」は東京外国語学校入学にはふれず、「明治六年三月、開成学校に入学独逸語を学ぶ」とあるだけであり、②は「明治」六年五月

東京外国語学校二入り后開成学校ニ於テ独逸語鉱山学ヲ脩ム」としか記していない。しかし、東京外国語学校が開設されたのは同年11月のことであり（開成学校の改称は同年4月）、和田垣の同校への入学は翌明治7年ではないか、と推定される。木場貞長は「私が和田垣君と親しくなりましたのは、明治七年で、兩人とも同時に其頃の外国語学校の独逸語科の官費生となりました。その後私と和田垣君外一名は、開成学校の鉱山学科へ転校を命ぜられました」と回想しており（木場貞長「少年時代の友人和田垣君と其の逸話」580頁、前掲大町編『和田垣博士傑作集』所収）、同様に前掲宿南『浜尾新』149〜150頁も明治7年と推定している。

なお、東京外国語学校については東京外国語大学史編集委員会編『東京外国語大学史―独立百周年（建学百二十六年）記念―』（東京外国語大学、1999）、開成学校を含む東京大学の前史については東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史 一』（東京大学出版会、1984）、をそれぞれ参照。

(20) 前掲『東京大学百年史 通史 一』286〜288頁。

(21) 前掲木場「少年時代の友人和田垣君と其の逸話」581〜582頁。

(22) 前掲『東京大学百年史 通史 一』295頁。

(23) 前掲『東京大学百年史 通史 一』303〜306頁。

(24) 『大学々生遡源』（刊行年不明）に収録されたもの。川澄哲夫編・鈴木孝夫監修『資料 日本英学史 1下 文明開化と英学』（大修館書店、1998）968〜969頁。なお、引用文中の最後に「和田垣や木場が鉱山から文学に転じた」とあるのは、彼らが後に東京大学文学部に進学したことをさしているのであろう（註(36)を参照）。

(25) 註(9)の①の「和田垣謙三博士年表」には、「明治」八年九月より同校に於て一年十一月英語学及び普通学修業」とあり、それぞれ「転英学」の学級と普通科のことをさすものと思われる。「転英学」の学級については前掲『東京大学百年史 通史 一』307頁、普通科については同書307〜308頁、310頁、350〜352頁を参照。

(26) 前掲木場「少年時代の友人和田垣君と其の逸話」582〜583頁。

(27) 高田早苗『半峰昔ばなし』（1927、日本図書センター、復刻版1983）36〜37頁。また坪内逍遙も当時の文学部について「文学部といつても、当時のは政治・経済が主で、西洋歴史、哲学史、国文、漢文等で時間が大部分充たされ、英文学はたかが六時間ぐらいであつたらう」と述べている（前掲高田『半峰昔ばなし』51頁）。

(28) 前掲『東京大学百年史 部局史 一』414頁。

(29) 前掲『東京大学百年史 部局史 一』417頁。

- (30) 磯辺弥一郎「英文学者としての和田垣博士」644頁、井上哲次郎「学生時代の和田垣博士」597頁、いずれも前掲大町編『和田垣博士傑作集』所収。また和田垣の洗礼については小山騰『破天荒（明治留学生）列伝』（講談社選書メチエ、1999）148頁参照。
- (31) 三宅雪嶺『大学今昔譚』（1946、大空社、復刻版1991）77頁。
- (32) 浜尾の生涯については、前掲宿南『浜尾新』を参照。
- (33) 前掲『東京大学百年史 部局史 一』873〜878頁、および東京大学経済学部編『東京大学経済学部五十年史』（東京大学出版会、1981）3〜6頁を参照。
- (34) 『東京大学法理文学部第七年報 自明治十一年九月至十二年八月』に掲載されたもの。山口静一編『フェノロサ社会論集』（思文閣出版、2000）46頁。
- (35) 引用文中の「ウォールカル」はウォーカー（Francis Amasa Walker, 1840—97）であると思われる。ウォーカーはイェール大学教授を経てMIT総長、またAmerican Economic Associationの初代会長も務め、古典派の賃金基金説への批判、企業家論の重要性の主張、高賃金経済論などで知られる（経済学史学会編『経済思想史辞典』（丸善、2000）39〜40頁を参照）。
- (36) この時に卒業した文学部の同期には井上哲次郎（哲学、政治学）、木場貞長（政治学、理財学）、中隈敬造（政治学、理財学）、国府寺新作（哲学、政治学）、岡倉寛三（政治学、理財学）、福富孝季（理財学、哲学）、千頭清臣（哲学、政治学）がいた（一）内は専攻した科目）。前掲山口編『フェノロサ社会論集』16頁参照。
- (37) フォックススウェル（1849—1936）は、イングランドのサマーセットに生まれ、ケンブリッジ大学に学び、ジェヴォンズの後継としてロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの経済学担当教授となる（前掲経済学史学会編『経済思想史辞典』326〜327頁を参照）。
- レヴィー（1821—88）は、イタリア生まれの帰化イギリス人で、キングス・カレッジの商業学担当教授、田口卯吉訳『大英商業史』（明治12（1879）年刊行）の原著者でもある（Frederic Boase『Modern English Biography, Volume II』（Frank Cass & Co.Ltd., 1965）406頁、堀経夫『増訂版 明治経済思想史』（日本経済評論社、1991）43〜44頁を参照）。
- なお、註（9）の②の85頁には他に「ケインズ、ミークー」について学んだという記述があるが、これがいかなる人物かは判明しなかった。

- (38) 前掲木場「少年時代の友人和田垣君と其の逸話」588〜589頁。
- (39) 阪谷芳郎「経済学協会と和田垣博士」640頁、前掲大町編『和田垣博士傑作集』所収。
- (40) 前掲木場「少年時代の友人和田垣君と其の逸話」589〜590頁。
- (41) 井上十吉「在英中の和田垣博士と予との交際」604頁、前掲大町編『和田垣博士傑作集』所収。
- (42) 末松謙澄「劍橋大学留学時代の和田垣博士」600〜601頁。また前掲小山『破天荒（明治留学生）列伝』147〜148頁によれば、明治15（1882）年のレント学期（1月〜3月）にカレッジに所属しない学生として大学に登録しているという。
- (43) 田村信一「ドイツ社会政策学会」157〜158頁、永井義雄編著『経済学史概説―危機と矛盾のなかの経済学―』（ミネルヴァ書房、1992）所収。
- (44) 和田垣謙三「講壇社会党」241〜242頁、『国家学会雑誌 第二卷第十三号』（1888）所収。
- (45) 西村稔『文士と官僚―ドイツ教養官僚の淵源―』（木鐸社、1998）421〜422頁を参照。
- (46) Tomas Riha "German Political Economy: The History of an Alternative Economics" (Bradford, 1985); 原田哲司ほか訳『ドイツ政治経済学―もうひとつの経済学の歴史―』（ミネルヴァ書房、1992）151〜156頁を参照。